雨のクリスマスに

小春月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨のクリスマスに

【Ｎコード】
Ｎ２１５８Ｇ

【作者名】
小春月

【あらすじ】
雨が降って、古ぼけたビルの下。彼に約束を破られたわたしはサンタのバイトをしていた。ますます憂鬱になる中、わたしにかかった声があって。

人生で不思議な事なんて、そう何度もあるわけない。

むしろ、不思議なことなんて、一回もない事の方が、多いはず。

わたし自身、そう思っていたし、わたしの周りも、そう思う人が大多数だった。

たしか、今日みたいに雨が降っていたはずだった。

世間がクリスマスなんてもので浮かれているとき。わたしは不幸せのどん底にいた。

急にぽかんと空いた予定を埋めるように、バイトを入れた事を心の底から後悔した。

幸せそうに寄り添う二人を見ると、その幸せをぶちこわしたくなる気持ちを抑えて、試供品をばらまく。

おまけに、雨まで降り出してくる。サンタの衣装が借り物らしく、雇い主はあわてて屋内に入るように言った。

わたしが雨宿りのために軒下を借りたのは、きらきらと輝く街には不釣り合いの、古ぼけたビル。赤いサンタの格好をして、灰色の古ビルの軒下にいる。

それこそ、不幸せの象徴のようだった。

「最悪ね。だいたい、彼が悪いのよ」

急な仕事が入ったなんて、絶対に嘘。わたし以外の女の子と、たのしそうに街を歩いてるんでしょうね。

ほんと、腹が立つ。

わたしがいらだった息を吐いたときだった。わたしの後ろから、声がかかったのは。

「彼にふられでもしたんですか？」

誰もいなかったはずだから、わたしはびっくりして、素っ頓狂な

声を出したと思う。
「そんなに驚かなくても、取って食べたりしませんよ」
声は案外に若い。でも、その声の持ち主の顔は見えない。ビルの奥にある階段の上から話しているようだった。
「そこでは、濡れませんか？　もうちょっと、奥に来たらどう？」
ほんわかした声に和んだという事もあるし、実際わたしが立っている所は、多少雨が風に流されてくるから、わたしは声の言うまま、奥に入った。
「世間はクリスマスですよ。あなたはひとり寂しく、雨宿りですか」
その物言いに、わたしはひどくムッとした。声は意外に若い。あきらかに、声はわたしより年下。そう思ったからかもしれない。
「しかたないでしょ。彼が仕事だって言うんだもん」
「家にひとりでいるのは、いやですか？」
「いやに決まってるわよ。家にいたって、どうせコンビニの売れ残り弁当をレンジで温めて食べるだけじゃない。ひとりじゃ、さみしいの」
わたしは試供品のティッシュを取り出して、鼻をかんだ。寒いから、鼻だけが冷たくなっている。
「ふーん。変わったサンタもいたもんだ」
「は？」
「だって、サンタの格好をしてるだろ？」
声はなにが面白いのか、きゃらきゃら笑って見せた。
すごく失礼だ。たしかにわたしはサンタの格好をしてるけど、これはバイトであって・・・。なんて、気がついたら弁解していた。
わたしはどうでもよくなって、声に返す。ひょっとしたら、心のどこかで楽しんでいたのかもしれない。
「そうよ。でもね、サンタも忙しいの。毎年毎年今日だけ働くのよ？　はっきり言って、楽しい職業ではないわね」
「そうなの？　ぼくはそうは思わないけどなぁ。・・・ねぇ、僕にもティッシュちょうだい。鼻かみたくなっちゃた」

一個ぐらい良いだろう。どうせもらってくれる人なんか、いないんだし。声の方に、わたしはティッシュを投げた。声の主をみたいと思ったけど、見てしまったら、なんだか消えそうに思えたから。
「ありがとね」
声の持ち主はティッシュを上手く受け取れたようで、わたしにお礼の言葉を飛ばしてきた。礼儀正しいんだ。
わたしはビルの階段に腰掛ける。短く赤いスカートを引っ張って、申し訳程度に膝を隠す。背中に張ったカイロがあったかい。
「きみは優しいねぇ。こんなサンタは初めてかも」
「あなたの方が変わってるわよ。きっと、すごく性格悪いんでしょうね」
「・・・・・・よく言われる」
やっぱり。急に落ち込んだ声に、わたしはくすりと笑う。意趣返しだ。これっくらい、許されるはず。
さあさあと、小雨の音が降り注ぐ。街は雨にくすんで、省エネの電飾は色を微かにする。
「ねぇ、この雨いつやむかな」
「さあ。僕はそういうの、気にしないから」
気にすればいいのに。お天気の方が、雨の日よりもずっと良い。
階段の上の気配は、じっとうずくまっているようだった。
「あなたも雨宿り？」
ふと気になって、聞いてみた。わたしの問いに、気配は驚いたようだ。しばらく考える間があって、気配は答える。
「まぁ、そんなところかな。ちょっと、からかってみたくなって」
「からかう？」
わたしは抱えていたカゴを下に置いた。手をすりあわせ、摩擦で温まろうとする。
「さむい？」
階段の上からはこっちの様子が見えるのか、声が心配そうな色を帯びた。

「大丈夫よ。貼るカイロ貼ってるから」
そう、と声はつぶやく。うん、とわたしもつぶやく。
もう一度、静かな時間が流れた。そういえば、と気づく。
いままで、こんなに静かな時間を過ごしたことがあったっけ。いつも、テレビの音とか、音楽を聴いていたような気がする。
そう考えれば、いまは貴重な時間だ。わたしは、心の中でつぶやく。
いつの間にか、自分が不幸せのどん底にいるなんて、忘れていた。彼のことも、どうでも良い気分だ。いままで怒ってたのも、馬鹿馬鹿しくなってきた。
わたしは気づけば、くすくす笑ってた。階段の上の気配も、わたしのくすくす笑いが伝染ったのか、くすくす笑う。古ぼけたビルの中は、くすくす笑いで満ちる。
「ね、たのしい？」
階段の上で、さきにくすくす笑いを収めた影は訊いてきた。わたしもやっと、くすくす笑いを収めて、言う。
「すっごくね。なんだか、馬鹿馬鹿しくなっちゃたのよ。彼のこともね。いままでイライラしてた自分のことも。あなたのおかげね。もう一個、ティッシュいる？」
「いらないよ。きみのだろう？　僕はもういいから」
階段の上から、たのしそうな声がふってきた。わたしは取り出し掛けたティッシュをカゴに戻てし、耳を澄ました。
雨の音が遠のいていく気がする。もうじき、あがるのかな。灰色のビルの中まで入り込んできた雨粒は、居場所を間違えたことを恥じるかのように、静かだ。
「きみに、プレゼントをあげようかなって、思ってね」
声は急に言った。わたしは意味を掴みあぐねて、聞きかえす。
「は？」
「なにか、ひとつだけ願いを叶えてあげる」
「なに言ってるの。わたしがそんなに子供だと思う？」

わたしは面食らったように、暗がりに潜む階段を見上げた。正確には、暗がりの階段に腰掛けているだろう、存在。
「ひとつだけ。なにが良い？」
「・・・・・・なんでもいいの？」
「あれ？　信じるんだ？」
おかしそうな声が返ってきた。ひょっとして、だまされたのかな。わたしは一瞬、そう思う。でも、それでもいい気がする。
「そう、信じるの。たまにはね。で、なんでもいいの？　言わせておいてから、これはだめってのはなしよ」
「うーん。そうきたかぁ。・・・なんでも、ってわけじゃないよ。願い事をふやせ、ってのもだめ。魔法使いになりたいって言うのも、だめ」
「そんなこと、言わないわよ」
わたしは隣に置いていたカゴを、無意識に持ち上げて抱きしめた。雨に濡れて、ほこり臭いにおいが、カゴに染みついている。
階段の上の影は、わたしの答えを待っていた。
なにを望めば良いんだろう。特にないなぁ。
こどもの頃なら、目をきらきらさせて、言うんだろうなって思って。
黙り込んだわたしを、階段の上の影はじっと待っている。
特にないって言ったら、悲しむかも。さっき、性格悪いって言っちゃったからなぁ。
なんだか気になって、わたしはあやまることにする。
「ねぇ、さっきはごめんね」
「え？」
何のことかわからない、みたいな声が返ってきた。
「ほらさっき、性格悪いって言っちゃって」
「あぁ。そのことか。いいよ、別に。気にしてないから。・・・それにしても、きみ変わってるねぇ」
声はおかしそうにけらけら笑う。やっぱり性格悪いわ、この人。

わたしはむむッと、眉を寄せた。あぁ、眉間にしわが刻まれちゃったかも。
「本当に、きみは変わってる。願いもないみたいだしね」
「・・・願いなら、あるのよね。たぶん」
「なら、それを言えばいい。僕が叶えてあげる」
声はそう言うけれど、この願いは自分で叶えたいんだ。わたしは前髪を掻き上げた。
彼と喧嘩した。昨日ね。彼は急に仕事が入ったって言って。わたしはそれを信じなかった。仲直りしたいけど、自分から言うのは気恥ずかしいわ。
わたしは肺の中の空気を全部、はき出してしまいたくなった。
「彼と会わせて欲しいわねぇ」
「それだけ？　それだけでいいの？　ほら、もっと・・・、そうだなぁ。彼と仲直りさせてくれとか。彼を殴らせてとか・・・」
「彼を殴ってどうするのよ・・・。仲直りなら、自分でする。あなたに手伝ってもらわなきゃいけないなんて、いや。でも、自分から彼に会いに行くのは、なんとなく不安だから、背中を押してもらいたいの」
「・・・きみがそういうなら、いいけどね。でもね、一度しかないんだよ。よく考えて」
声は素直な驚きを含んでいた。そして、なぜか願いを変えようとする。
性格悪いだけじゃなくて、意地も悪いな。わたしはそう考えて笑う。階段の上の影の気に触ったようで、少し棘のある声がふってきた。
「なに？」
「なんでもない。ねぇ、願い事は決まったわ。彼と仲直りしたいから、背中を押して」
「ほんとにそれで良いの？」
「さっき、わたしが良いならいいって、言ったじゃない。ほら、わ

たしはこの願いで良いの。いまはどんな願いよりも、切実に願う事よ」
わたしが言い切ると、影はゆっくり頷いたようだった。
それっきり、声は静まりかえった。聞こえていた雨の音も消え、雨が上がったこと示している。
やっぱり、騙されたか。わたしは息を吐いて立ち上がった。一度、階段を振り返って言う。
「ありがとね。彼に謝りに行く勇気が出来たわ」
「雨が上がったよ。ほら、きみの願いは叶った」
声はどれだけ言うと、どんなに言葉を投げても返答は無かった。
「うーん。やっぱりおとぎ話ねぇ。まぁ、いいんだけどね」
伸びをして、わたしはポケットから携帯電話を取り出す。電話帳を引っ張り出して、彼の番号にカーソルを合わせたとき。
雨が上がって、雲の間から見える星を見ていたわたしの手を、後ろから握った人がいた。
冷たくて、大きな、わたしの一番大好きな手。

（後書き）

季節外れもいいところなんですが・・・。応募しようと思って、結局送信ボタンが押せなかった作品。このままでは可哀相なので、日の目に。

声は気まぐれな天使のイメージ・・・・・・なんですが、書いた本人すら、ともすれば忘れる（哀）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2158g/

雨のクリスマスに

2010年10月8日15時52分発行